

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認誌第三五二號
昭和二十五年二月廿五日印刷 昭和二十五年三月五日發行

第十六卷 第三號

浄土

三月號

浅春さまさま 吉田絃二郎

鬼の面 内山憲尙

善人悪人 佐藤賢順

勤行講讀 佐藤密雄

1950

3

平和を生むもの

民主主義、自由、といった言葉とともに、戦後の日本人が好んで口にするものは「平和」である。これがいかに望ましく、従つてその實現、確立のためには、どんなに苦勞しても少しの無駄もないことは分り切つてゐる。

しかし一体、平和を論じる人たちは平和の根本をどこにおいて言つてゐるだろうか。世界情勢がどうの、講和會議がどうの、勿論それも重要であり、平和建設の大きな要素であることに間違ひはない。だがもつと身近かに、毎日の新聞をみても、一体私たち自身、私たちのこの狭い周邊、この社會に、平和の微笑があるか、どうか、考えても疑がわしいことである。平和を愛するものにとつて、先づ自らの生活の中に平和がなくては、全く意味ないことである。

昨暮インドで開かれた「世界平和愛好者會議」には世界三十カ國から、平和を守り抜こうとの決意にもえた人たちが集つて、政治・經濟・文化各般にわたる主要な問題を討議された。そこで主要議題の中に、すべての「紛争の根本となる自我の克服、殊に個我と集合我の矛盾」の問題がかかげられていたことは、私たちにとつて深い反省をあたえてくれる。

古めかしいが、いつも新しい眞理——平和は克己・自制・自律、それをほんとに身につけている人によつてはじめてほんものとなる、ことをこの議題は物語つてゐる。(藤田寛雅)

目次

善人・悪人……………佐藤賢順(5)

先祖代々……………中野尅子(9)

三つの願ひ……………竹中信常(18)

春寒……………佐藤治子(4)

浅春さまさま……………吉田絃二郎(1)

鬼の面……………内山憲尙(12)

雛まつり……………中村康隆(16)

佛さまのぞうり……………森正・義(15)

三月の常識……………(9)

日常勤行講讀(三)……………佐藤密雄(21)

芝園だより



浅春さまごま

吉田 絃二郎

佐賀から西の方七八里、有明の海に近く鹿島といふ小さな昔の城下町がある。わたくしは子供のころ、二度その町をたづねたことがあつた。櫻の花につつまれた美しい丘があつたのを記憶してゐる。

さて、話は今度の戦さのをりのことであるが、その鹿島の町に近く寺院があつた。院主は老いたる尼僧であつた。

寺には古い鐘樓があり、朝夕に村の人々道行く人々、田畑に耕す人々に諸行無常のひびきを聴かせてゐた。

ところが、こゝにも戦さのなまぐさい嵐は吹きすさんで、梵鐘の供出といふ問題が起つて來た。役場の人たちは幾度となく山門をくゞつて鐘の供出を迫つて來た。しかし老尼はいつもくりかへして言つた。

「この尊い鐘を鑄つぶして、人を殺す彈丸を作るなどとは以ての外でございます」

つひには軍部の人たちも手をかへ品をかへて説得にかゝり、脅かしにかゝつた。

尼僧は答へた。

「先づ、この婆を殺してから、梵鐘を持ち出してくださ
い」

さすがの軍閥もつひに、この老尼の堅い信念には打ち克つことはできなかつた。

筑紫のはての草深い田舎寺の一老尼の話であるが、その見上げた信念の強さはガンヂーを想はせ、サヴオナロラを思はせる。

筑紫の平野にはもう菜の花のかゞやくところだ。有明の

海をへだて、多羅や雲仙の山々が煙つてゐるころだ。

老尼によりて守られた梵鐘は、静かな春の彼岸會のひびきをつたへてゐることであらう。

今日は四十幾年振りに昔の友人から、こまごまとかれの心情を記された手紙を受け取つた。かれとは玄海の孤島の對馬で別れた切り一度も逢つたこともなかつた。わたくしが鶏知といふ町の要塞砲兵隊にゐたころ、かれは竹敷の海軍に勤めてゐたので、日曜など一里半ばかりの道をたどり、かれの官舎をたづねて行つたものである。

かれはそのころすでに結婚して、圓滿な家庭を持つてゐた。

今日の手紙によると、かれはこの四十年の間に、たゞ一人の愛娘を失ひつゞいて夫人を喪ひ、今はたゞ獨り晩年の静かな日を送つてゐるが、時折りは弓など引いて楽しんでゐるといふことであつた。かれの手紙は淡々として、いさゝかも愚痴らしいものがなかつた。かれは悟り切つてゐるやうに思はれる。

かれの手紙を手にしたがら、わたくしはかれの一生についていろいろと考へた。かれの生活は平凡であつたか

も知れない。しかし老いて妻子ともに悉く失ひ、静かに弓を射て、楽しんでゐるかれの生活はまた、まことにありがたい暗示をあたへる。

かれもかつては「一人生とは何ぞや？」といふ問題に取り組んで悩んだ時代もあつたであらうが、今かれ自身の淡々たる静かな生活を凝視する時、一切の苦患は取り去られて、静寂な落日の光りを浴びてゐるやうな氣がする。かれの現在の諦め切つた姿を想像すると

ともかくもあなたまかせの年の暮 一茶

俳人一茶の句も偲ばれる。

この友人とわたくしとは故郷の小學時代からの幼な友達であつたので、かれの手紙を讀んでゐる間に、わたくしの頭には子供時代のことのいろいろと浮かんで來るものであつた。

かれの祖母が熱心な信心家だつたので、御本山から説教のお坊さんが派遣されて見えると、わたくしたちは二晩も三晩もつゞけて寺にお説教を聴きに連れられて行つた。説教の合ひ間には長い柄の干杓がみんなの間にまはされて、人々はお賽錢を干杓の中に入れた。

アイルランドの物語を讀むと、さまざまの妖しい傳説

があり、それがまたアイルランド文學の特異な魅惑となつてゐるが、わたくしたちの子供のころはやはりアイルランドに見るやうな迷信がすこぶる多かつた。人々はそれを信じてゐた。

わたくしの隣りの家の老婆は眞晝間、山に薪を取りに行き、山の墓で、幽霊を見たといひ、長いこと患うてゐた。その山の墓では日の暮るゝころ一度わたくしは狐を見たことがあつた。

友人はとても芝居が好きであつた。芝居を観ては夜おそく家にかへつて来るのであつた。或る月の明かるい夜かれはいつものやうに、芝居見物から歸つて來た。かれはその夜、大入道を見たといつてゐた。それ以來かれは夜芝居の見物を止めてしまつた。あのころはそんな話も信じられてゐた。

かれは小學校時代も學問は苦手であつた。しかし海軍に入つたかれは機械にかけては天才的な閃きを見せた。だが人が善いばかりでさして世間的な成功もしなかつた。

だけどわたくしはこの平凡な生涯を送つた友人を忘れることができない。かれは人生の哲學を論じない。が、

かれは世間の哲學者よりも善人であり、世間の哲學者よりも、妻と子の死を深く悲しみ、高い諦めに徹してゐる。わたくしはかれが妻と子の遺骨を故郷の墓に葬り、孤獨の晩年を弓など引いて送つてゐる姿を尊く思ふ。

かれはわたくしに逢ひたいと言つて來た。逢つて昔を語りたと言つた。しかし妻を失つた悲しみを語りたといは一言も述べてゐない。妻の死、愛娘の死もかれは、今では松吹く風のやうに感じてゐるらしい。悟られぬ悟りに徹した生き方である。

老いて孤獨であることは寂しいだらうと、わたくしに問ふ人がある。たしかに寂しい。しかし十餘年の間に寂しさにも馴れた。しかし病のことを思ふと心細い。一日と不自由なからだになることを感じては人知れず溜息もつきたくなることがある。

だがわたくしも亦一ともかくもあなたまかせの「諦め」を幾分見出さうとしてゐる折もある。

孤獨も亦佛恩である。

嵯峨の竹林の中の祇王寺から、二三十歩上つて行つたところに、瀧口と横笛の像を安置した庵がある。その庵

を守つてゐた人は今も健在であらうか。肥前の佐賀でうたはれた豪商のなれのはてだといふ話であつたが、世を捨て、嵯峨の庵の守をしてゐたのであつた。

「四十度の高熱にうなされながら、疊の上を這つて水甕の水を飲みに行くこともあります。これもまだ業が盡きないからでせうと諦めてゐます」と言つてゐた。

時々、寂しさのやりどころない折など嵯峨の堂守りの老人を思ふ。

春 寒

近づけばいづれも高く椿咲く

今落ちしばかりの椿、蹈むまじく

春の日の移り射し來て彼の人に

友待つや春の山門出つ入りつ

刈りこみし八ツ手熊笹春を待つ

佐藤 治子

みほとけのお顔

自らの罪のふかさにおののくとき

合掌して仰ぐみ佛のあることの喜び

み佛の相好は端然とつねにかわらないが

私の心は轉々としてみ佛を仰ぐ

いきどほり、むさぼりの心を抱くとき

み佛のお顔のなんと悲しげなることよ

悲しみ、なげきの心にしづむとき

み佛はともに泣いて下さる

喜びにうれしさに心おどるとき

み佛のお顔のなんと妙なることよ

み佛のお顔は端然としてかわらないが

み佛はいつも私の心を包む

大阪 森 正義

善人・悪人

法然上人
法語私釋 (二)

——罪人なお生る、況や善人をや——

佐藤賢順

罪は十惡五逆の者も生ずと信じて、少罪を犯さじと
思うべし。罪人なお生る、況や善人をや。

(勅修御傳卷第二十一)

これは一紙小消息と呼ばれている上人の短い手紙の中の
一句であります。小消息は一枚起請文とともに、日常のお
勤めなどに諷誦される法語で、朗々とした信仰のリズムを
持つていきます。殊にこの一句の前後は、深い信仰から出て
くる一種の論理とでもいうような力で、疊みかけてくる趣
があつて、毎朝讀みながら、壓倒される感じがするので
す。一枚起請文が念佛の行の方面に重きを置いていゝとす
れば、この方は佛の本願の信を表に出してれるということ
ができました。それだけに小消息の中には、いろいろと
大切な問題が包まれていて、深く味えば味うほど、その含
蓄は深いのであります。

さて淨土教が人間の眞の姿の見直しに、というよりは寧ろ見極めに、出發するということについては前回にお話しました。十惡五逆というような數々の恐しい罪を何時犯しかねないともわからぬ人間のはかなさ、頼りなさ——この罪苦こそ佛の救済を願ひ求める深い動機であります。私のはかなさをひしひしと感ずればこそ、佛の大きな救いの力に飛びつこうとするのであります。

佛の救済の力は、本誓の重願といわれている通り、誠に強く大きな力で、たとえ過去において十惡五逆の罪を犯した者であつても、救い導いて下さる。過去といつてもこの現在の一生を過去とか現在とか未來とかに分けたときの過去だとは限られない、現在ある一人の人間の過去には、この前の世、またその前の世というように、幾世代が疊み込まれているかわからない。私の前には兩親があり、その前

には祖父母が、その前には曾祖父母が、というように、溯ればどこまでも無限の過去へ溯ることが出来ます。今の私はそのどこかで犯した罪を荷なつてゐるとも考えられまゝす。またこれから先も、いついかなるはずみで罪を犯さないとも限らない。このような人間さえも佛の本願力は見捨ててはおかないのです。この法語に先立つて、小消息の初めの方には、「罪人なりとても疑うべからず。罪根深きをもきらわじとの給えり。……我が身わろしとても疑うべからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりとの給えり」と、唐の善導大師の「散善義」の一節の意味が引用してあつて、罪惡生死の凡夫であつても、佛の救いを疑つてはならないということが諄々と説かれています。「との給えり」とは善導大師がそう言われたという意味であります。

しかしそれほどの大願業力であつても、罪を重ねた者よりは罪の少ない者の方を先にするというのは當然の事で、惡人よりは善人の方が救われ易いのはきまりきつております。自らの罪の深さを見極めるとともに、これから先の頼りなさをはつきり意識することは大切ですが、それと同時に、罪惡からはできるだけ遠ざかつて罪苦を荷なわぬようにしなければならぬ。「少罪をも犯さじと思ふべし」であります。淨土教では罪惡深重の凡夫も佛の攝護にあずかることができるというので、平氣で破戒無慚な生活に落ち込んでゆき、本願の力の大きいさを、却つて自分の耽溺生活の

口實にするような者が、昔はあつた。今でも淨土門には、持戒堅固な戒律生活を敬遠したり、時には輕蔑したりする傾向があります。これは本願に甘えた信仰で、俗に本願ばかりと申しますが、法然上人はこういう誤つた信心を戒めて、「惡人をも捨て給はぬ本願ときかんに、まして善人をば、いかばかり喜び給わんと思ふべき也」と言われました。

これまでは普通の考え方で、何人にも異存はない嚴然たる事實ですが、しかし、一體、善人とか惡人とかはどこで區別するのでしょうか。善惡は人間が互に社會を作つて生活してゆくためには、どうしても依り所としなければならぬ標準ですが、嚴密に言つて、その區別はどこにあるのでしょうか。

自分が正しい善いことと信じて行つたことが、大變に他人に迷惑をかけることがあるし、他人の爲を思つてしてやつたことが、全く反對に誤解されることは珍らしくない。また、一時の社會的な便宜や必要から定められた規則などによれば、昨日までは罪であつたことが今日は罪でなくなる、というようなことがある。例えば闇物資の賣買などの經濟事犯などがそうで、闇賣買で罪を問われても、それを慚愧するとか自責するとかする人の少ないのは、白と黒とを分ける共通した標準がないからではありませんか。殺人強盜などになると、ずつと善惡の別ははつきりしてきて、如何なる場合でも人殺しや盜みが罪惡であることは、動か

しがたいことでしよう。ところが、これとても果してそうでしょうか。人間的立場からいえば、殺人でさえも一時は立派な道徳とされたことがあります。仇討ちなどはその一例で、仇討が立派な行爲であるとされて、却つて仇討ちをしないのが意氣地なしのようになつたのは、わが國ではよほど古いことで、平安朝には既にさういう考え方がありました。恩義には恩義を以つて答えるが、怨讐には怨讐を以つて酬いる、というのが中世の道徳でありました。強盜や詐欺でも、大がかりで組織的、合法的になればなるほど、罪惡ではないような錯覺を起させることが多いのはおかしいではありませんか。

人間と人間との間では、善い行爲と信じて爲したことが實は利己的な動機から行われていたり、その逆に悪いはずの行爲が、案外多くの人から肯定されたりするのです。道徳は人間と人間との間の關係ですから、この立場では眞の善惡の標準というものは成り立ちません。必ずそこには幾分かの主我的な動機が働いていますから。

そこで道徳的な關係から、一步轉じて人間と佛との關係という宗教的世界へ入つたらどうなるでしょうか。そこには揺ぎなき絶對善の盤石が置かれています。それは何でしょうか。大慈悲という絶對の愛です。この立場から見れば、人間的小さな善の行爲は大ていは惡になつてしまします。善人と呼ばれている人々は大方、惡人になつてしま

ます。そしてその反對に、人間的な惡は、よく考えてみれば、そこには何か多少とも許してやつてよい理由があつて、惡とはいいいながら他愛のない惡である、ということになります。

佛の大慈悲から見れば、五逆十惡の人間でさえも、哀愍すべき所があつて、救済せずには置けないのです。いや深重の罪惡に苦しむ者にこそ、大慈悲はまず救いの手を差し伸べるであらう。恰も、母の愛は、どの子供に對しても平等であるが、健やかに賢い子は放つておいても立派に成人するけれども、からだの弱い才能の劣つた子の行末こそ一層氣がかりになるように、大慈悲であればこそ、善人よりは惡人の方を、罪惡深重の輩を、そのままに放つては置かない、というのであります。

果せるかな、法然上人は別の所で、先の法語とは全く逆のお言葉を述べられたと、記録にあります。

善人なおもて往生す、況んや惡人をやの事。私に云く、彌陀の本願は自力を以て生死を離るべき方便ある善人の爲におこし給わす。極重惡人無他方便の輩を哀んでおこし給えり。然るを菩薩賢聖も之について往生を求め、凡夫善人もこの願に歸して往生を得。況んや罪惡の凡夫もつともこの他力を憑むべしというなり。(醍醐本法然上人傳記)

この記録の確實性については異論もありますが、こうした

お言葉があつたとしても決して不思議ではなく、むしろ本願力への信仰の極まる所、當然こういう表現があるべきであります。

ボードレールは巴里の裏町の醜惡を詩に歌いました。文學の世界には、通常の道德の規範を越えて、罪惡の意味を見直そうとするものが珍らしくありません。永井荷風は一世のあらゆる罪惡、人間のあらゆる弱點も美しい詩であると思ふことができな。詩の生命は惡であるか惡の生命は詩であるかと、疑ふことさえ度々であつた一と或る作品で書いています。彼は「惡徳が産んでくれる悲哀を喜ぶ」ので、その限り文學の世界に止まつてゐるだけで、これを哀れむというような宗教の世界へはまだ一步も入つておりません。これを突き抜ければ、一切を包む絶對愛の春陽に照らされた沃野の展望が開けるのです。

法然上人の「況んや善人をや」と「況んや惡人をや」とは決して矛盾するものではありません。上人は或る時は「況んや善人をや」と言われて、弟子達の方に向つて道德生活の貴さを訓されたことでありましょうし、また或る時は、一況んや惡人をや」と言われて、遙かに如來のお姿を仰いで、大慈悲の限りなき力に感謝せられたことでありましょう。一つは論理的立場、一つは宗教的境地であります。もし後者を採つて前者を捨てるといふようなことがあれば社會生活は恐るべき亂脈に陥りますし、またその反對であ

れば、宗教生活の深い喜びを味うことはできません。

法然上人の思想や信仰はいろいろに發展すべき胚芽を藏した種のようなもので、後へも前へも右へも左へも、どつちへも發展する可能態が包まれています。決してそれは或る歴史家達の解するようには、旧佛教から新佛教（例えば親鸞聖人の思想など）への過渡的段階にあるものではありません。それは無限の思想や信仰を收めた寶庫であつて、未完成的な過程ではなく、それだけで完全圓具なのであります。親鸞聖人にも、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや惡人をや」といふ言葉があります（歎異抄）。一方的に追及した場合、當然こうした表現となるのであります。

宗學大會と佛教論叢

戦後まだ學界が混沌の中にあつたのに、いち早くさがけて二回にわたつて本宗の宗學大會が開かれ、しかも、その學的水準の高さを示したことは、當時斯界に大きな反響をよび、つよい刺戟を與えたことは今尚ほ印象に残つてゐる。

その成果は「佛教論叢」の第一・二集の二冊になつて順次公刊され、宗學大會を中心とする研究の全貌内容を如實に知ることが出来るものとして各方面に迎えられる。

いま第三回宗學大會は青葉の東北仙臺大學を會場として開催されようとしてゐる。教學界關係多數の人士がこの機に仙臺に集り、重ねて宗學振興の盛觀が繰りひろげられ、さらにその研究が、佛教論叢第三集として學界に送られることも言うまでもない。従つて本會はこの機に「佛教論叢」第一・二集をともしに座右に備えられるよう左の特價で希望者にお頒ちします。

佛教論叢

第一集 特價 一五〇圓 (送料不要)



先祖代々

中野 尅子

茄子でも、胡瓜でも、お米でも、品種が改良せられよくなるが爲めには、何度も獲つては蒔き、蒔いては取り、繰り返へし繰り返へされて何代、何十代、何十年何百年たつて、初めて良い苗や良い木が出来て来たのです。

私達が唯今、喰べたり使つてゐるモノは、どんなものでも、斯くして何十年何百年の苦心や努力が重なり重つて集積した結果で出来た最優秀の物ばかりと云つてゐるのです。蜜柑や林檎の一個でも、これまで改良せられるのには永い間の努力の結果です。だから平常喰べてゐる白菜、大根の一つでも實は最優良種が残され、用ひられてゐるのです。私達素人は、それ程心苦の要した重大なる研究の結果コレが出来たとは思はずに、平氣で喰つたり、使つたりして、まだ不味いとか、高値だと云うてコゴトを云つてゐるが、實は専門家が、其の品種を完成し、其の製品を造り出すまでには何百の苦心と研鑽が積まれてゐるかわからぬ。

況んや、複雑な組織の飛行機や汽船、建築物や精巧な機械が出来上がるまでには、何千回何萬回の實驗や改造の結果、コノ位に仕上げられたのです。簡単な一個の時計、ラジオの中にも、直接これを發明した人の苦心ばかりでなく、其の發明者を出すまでの一切の文明文化が、歴史となつて籠つてゐるのです。だから一個の器具、一本の苗の中にも、前時

三月の常識

雛まつり(三日)

國民祝日が定められたときに、この女の子にとつての楽しい日が省かれてしまつた。男女同權・男女共樂という甚だ新しいお役人の頭からすれば、或いは五月のお節句を一括して「こどもの日」としたのが、この日に女の子もというわけなのかも知れない。しかし女の子たちはそんなことは頓着なく依然として町でも村でもお人形を飾つて、とにかく楽しんでゐる。そして若い母親も、老いたる祖母も、何かチグハグなことのみ多い今の世に、せめては變らぬこうした行事の中から、案外若かりし日をなつかしがつてゐるとも言える。結構なことである。ましてや人形店にとつては、この年中行事は祝日にならうが、なるまいが是非保存したいところ。

しかし雛まつりのほんとうの意味はどうあるのか、子供にとつての、難しく言えば情操教育の上からも、是非知つて頂きたいと中村康隆先生にお願いして放送原稿を頂いたから充分にその古今東西に結ばれた意味をお読み

代の大々の全苦心努力の一切が含まれている。

湯川博士が中間子の存在と、其のハタラクを理論的に證明し、終に實驗的に認めしめるのに至つたのも、湯川博士一人の功績でなく、コヨまで判らしめた前代の幾多の學者の努力功績があり、先輩の研究の上に一つを附け加えては次の發明を造つて來たのです。だから湯川博士の研究もこれを土臺として今後次々に偉大なる業績が、亦、造られて行くのです。それ故リレー式に永い間の進化と努力が重なり重つて、だん／＼良くなり、段々發達する。恰度川の水が流れ／＼て川幅も廣くなり、水量も増すように傳統と進化によつて、發展と向上をするのです。だから自分一人が偉いのでなく、大きな顔をしてはいかぬ、皆大きな先輩のお蔭、苦心の賜物です。

今私は、「先祖代々精霊」と書かれたお位牌の前に坐つて拜んで居り乍ら、其の私一人の中に父母の存在と功績が籠つている——いや其の先代、其の又先々代の御先祖も私の中に生きて御座る。二代や三代、三代や四代でなく先祖代々、神武天皇以來の全日本の生命と働きが遺傳して、其の「私の生命」となり、私にコレをやらして居て下さると泌々感じました。「先祖代々」を拜み、先祖代々を感謝することは當然で、先祖代々が無ければ「私」は無く、先々代々の總ての結晶が「私」となつて、今、私をやらして下さる。

だから過去一切の生命と存在に感謝し、その全功績を無にせぬように是れを傳へ、是を顯揚する責任があります。それなくては、自分が活かして貰つてゐる値打ちが無いし、又將來の子孫や文化に對しても申譯ないのです。それ故傳統の一環、リレーの一員として自分は自分として十二分に働いて、自分の配位と負擔を果たさねば相濟まぬ。これが「追善し」「廻向して」過去並に將來の爲めに、自分が精一杯所以です。

御覽なさい、その意味で庭鶏や豚の家畜の一匹でも、麥や豆の野菜の一種でも、或は松

とり下さい。——一六頁をどうぞ——

善導忌(十四日)

元祖法然上人が「偏へに善導に依る」と言われた言葉が、その全てを語るように、淨土宗では善導大師を「高祖」と仰いでゐる。廣く淨土教の全歴史の上からみても、高祖は中國教士教の第一人者であり、唐の永隆二年(一三四一)三月十四日六十九歳で寂されたと傳える。元祖が「偏依善導」と言はれたのは、善導が上古の先達だからでもなければ、唐代の名僧だからでもない。元祖にとつて善導はど、三部經の經意を自分の日常生活の中にひつとらえた人は、他に見出せなかつたからである。そこに元祖は、依るべき善導を見出したのであつて、元祖の透徹したこの姿を通してまた善導大師が更に仰がれる。

お彼岸(十八日—廿四日)

春分の日(廿一日、國民祝日)では「自然をたゞえ生物をいくしむ」日としているが、要は「春のお彼岸」であり、「彼岸の中日」である。春分の日、それを中日として前後七日間

でも杉でも、時計でも茶碗でも、下駄でも電車でも、パーマや海水着の流行の一つまでが日に日に進歩し進化して成長發達して居らぬものはないのです。自分一人が良く活きると云うことは、自分「一人」が活きることではなく、自分の中に在る「複數」を活かすことです。所謂先祖代々、全日本、全世界、全天地が自己の中に終局しているから、その總てを活かさねばならぬ。時間的に動物や植物や無機物の一切の「生命」が自分に流れ込み、空間的に横に一切の「存在」が皆、私に關連を持つて、私を助け、私を働かして呉れるのだから、其の十字點の一存在としての私は、明らかに「無量壽」であり、「無量光」であります。其の一個の存在がそんな立派な無量壽、無量光の絶對的存在だと本當に知つた時それが「覺者」であり、「佛」と云うのです。其の佛なら其の一切の無量生命と、無量存在を生かして行かんならぬ。活かして行こう、働かして行こうと常に念じ、常に努力せずに居れませぬ。これが「南無」の生活です。眞實を知つて、眞實を活かし、眞實に生きんならぬと努力し精進することを信仰と云うのです。だからコレを最も簡単に「南無、阿彌陀、佛」の一稱念一に現わし、一句一行に徹したのが釋尊、善導、法然上人等、諸先輩の行持であり、同時に「私の」誓願、「私の」生活であります。

そしてコレは「私」だけの道でなく、總ての人が斯の道に來り、斯くの如くあらねばならぬ。南無妙法蓮華經と云うのも、其の南無阿彌陀佛であり、アーメンと眞實を誓ふのも其の南無阿彌陀佛の信仰生活の外にない。宗教は斯く一本であり、一元であります。一つの眞理によつて總ての文化は伸びつゝあるのです。文化の實相を宗教と云うのであつて、生活の一部分に「宗教」と云う塊りが有るのでありませぬ。信ぜんならぬから宗教をやる——のではなく、既に生ける事態が宗教であり、宗教を離れて、一切の存在も意義も成立たぬのです。私達の生活は、常に大宗教、大信心、大念佛の生活であらねばならぬ。

に、誰のということなく一家の墓所を拜みに寺詣りする風習は、民俗として古いものであり、なつかしいものである。季節といい、これからいよいよ農耕に着手するので、先祖まつりに最も適わしい時として、この日は昔から祭日になつてきたものである。

梵語の「波羅蜜多」を譯して「到彼岸」という。即ちこれ生死流轉の此の岸を、すみやかににはなれて、常樂涅槃の彼の岸に到るという意味である。善導大師は、この日は太陽が正東から出て、眞西に没するから、日の没するところを觀じて西方佛國土の所在を知り欣慕の心を起すべきことを説いていられる。

「お彼岸」は全國的な生活行事であり、その歴史も古い。この日、亡き先祖をまつり、心を淨らかに與えられた生命を感謝して、生活への正しい心意を新たにすべきである。こんど「お彼岸の話」が「淨土トラクト」の第二集として近刊される。年々に正しく迎えてゆきたいこの行事の眞意義を、この書を通じて、したしく知つて頂きたい。それは誠に適した「お彼岸の話」です。



佛典
童話

鬼の面

内 山 憲 尙

むかし、印度の乾陀衛國かんたえいこくと云うところに、旅役者が住んで居りました。旅役者と云うのは町から村へ、村から町へと旅をしながら芝居をして歩く興業の俳優であります。

この旅役者は座頭ざとう（この團體の團長）と五人の大人の役者と一人の子役（子供の役者）の七人からなつていて役者と云つても、大きな車を引いたり荷物をかついだり小屋をたてたり力仕事をするので、みんな力の強い大男ばかりでありました。

それは秋も、もう終りの淋しい頃のことでした。この一行が婆羅新山はらしんと云う山へさしかゝつて参りました、明日はこの山を越して、隣りの町で小屋をかけて興行をする事になつていますので、明るいうちに山を越して、夕方までには隣りの町へ下りようと、みんな一生懸命に

山をのぼつて來ました。

ところが、どうしたことか、路が次第に細くなつて、だんだん暗い森の中へ入つてしまいました。

「これは、道をまちがつたんだ……」

「こまつたな……」

いろいろさがしましたが、大きな道には出て來ません、路は次第に細くなつて來て、しまいには路がなくなつて來ました。そのうちに、夕方になつて、たゞさ々暗い森の中は眞暗で、もう歩くことも出來ません。

「おい、もう歩いてても駄目だ、足はつかれてくるし、お腹はすいて來る、どこまで行つて道に出るかかわからない。こゝで休んで行こう」

座頭の聲に一同は、どつかと腰を下ろしました。「お腹がすいたね。」

「それでは、御飯にしよう。」

一同は包から辨當をとり出してたべました。

「この山は婆羅新山と云つて、昔からおそろしい鬼が住んでいると云われているところだよ。」

「そうだよ、この山に迷い込んだ者は助からないと云うことを聞いている。」

「おどかすなよ、鬼なんか、こわいものか……俺の力で一打ちだ！」

空元氣は出して口で強そうなことは言っていますが、聲はふるえています。

「寒くてやり切れない、それに暗くてこまる火をたこう。」

枯枝を集めて来て火をたき始めました。

「鬼つて恐いんですか……」

子役の子供は、ふるえ乍らたづねました。

「それは、恐いさ、しかし俺たちがいるから大丈夫だ！」

「鬼は火がきらいだから、火さえたやさなければ近よりはしないよ。」

「それでは夜通し火をたいているんですか。」

「そうだよ——それに、こう寒くてはやり切れない、火

をたやすと、こゝえて死ぬかも知れないぞ……」

「では、もつと枯枝を拾つて来ましょう……」

子供は枯枝を集めては火のところへ持つて来ます。

晝の疲れが出て、一人二人と火をかこんでそのまゝ横になつたかと思うと、ぐうぐういびきをかいて寝て行きます。

たつた一人最後まで起きていた人も、子供に、

「おい、誰か一人は起きていないと、火が消えるから、

お前は夜通し起きているんだ、火をたやしたら駄目だよ。」

と云いつけて、そのまゝ横になつて、ぐつすり寝込んでしまいました。

子供は、たつた一人で、火をたやしてはならないと枯

枝をくべ乍ら火の番をして居りました。そのうちに夜はだんだんふけて来て、山の中のことですから、寒さは次第に加わつて参ります。

「オー、寒い、寒い……とてもやり切れないぞ……」

子供はふるふるふるえ出しました。ふと思ひ出したのは、芝居に着て出る赤鬼の着物です。

「あ、そうだ、あれなら綿が入っているから、あたたか

いぞ。」

芝居の衣裳の入っている行李の中から、赤鬼になる時に着ける衣裳を取り出して着ました。身體にびつたりとあつて、とても暖かです。

「よしよし、これで、こゝえ死ぬこともないぞ……」

よろこんで、火のところへ歸つて見ますと一寸外したので、火が消えかけてしまつています。

「おや、消したら大變だ……」

いきなり枝をくべましたが、なかなかもえつきませんふうふう吹きましたが白い煙が立つばかりで、煙が眼に入つてけむくてたまりません。思い出したのは、今鬼の衣裳を出すときに一緒に入れてあつた鬼の面です。

「そうだ、お面をかぶれば、口は大きくあいてゐるし、眼は小さいから、火をふくのにはけむくないぞ……」

早速、又鬼の面をとり出して、かぶりました。面をかぶつて、吹きますと、いゝ工合に煙は眼に入りません。やがて火は、ぼうーと燃え出して來ました。「これでよかつた」と兩手を出して火にさし出した時でした。

火の向う側で寝ていた一人の役者が、ふと眼をさました。眼をさましますと、火は眞赤になつてぼうーと

燃え立ちました、その眞赤な火に照らされて、おそろしい顔をした赤鬼が、兩手をぐつと前につき出して、こちらをじつとにらんで居るではありませんか、おどろいて

「キヤー」

と大きな聲を出したかと思うと、横の男の頭をいやと云う程、けとばして、逃げ出しました。今度は頭をけられた男が眼をさまして見ますと、おそろしい赤鬼が、ぐつとにらんでいますから、

「ワアー出た！」

と逃げ出しました。子役の子供は何んだかわけがわからず、あつけにとられて、立ち上りました。

二番目の男の聲に横にいた三人が眼をさまして、見ますと、おそろしい赤鬼がニューと立つています。

「ワアー……助けて……」

最後に座頭が眼をさまして

「ワアー、赤鬼だ……」

とにげ出します。子供は

「オーイ、ちがうよ……」

とおつかけますと、

「キヤー、助けて……」

と一同はどんどん、元と来た方へ逃げ出しました。

岩と云わず、谷川と云わず、どんどんにげて身體中傷だらけになつて、やつと村へかけ込んだ時には、朝方になつて、明るくなりかけて來ました。

子役の子供は後をおつかけて來ましたが、途中で鬼の面を外して、村まで來てみんなに追いつきました。

「どうしたんですか……」

「おや、お前だつたのか……」

「てつきり、本者の鬼かと思つた。」

なんだ……」

みんな氣がぬけた様に、そこへぐたりと倒れて眼ばかりパチクリしていました。

やがて、眞赤なお日様が森の上から、ニコニコ笑い乍らのぼりました。

(百喻經より)

一切の凡夫も亦復是の如し、煩惱に處り善法に飢ゆ。

而して遠く常樂・我淨の無上の法食を求めんと欲し便ち五陰中に於て横に我を計す。我見を以ての故に生死に馳り煩惱の遂ふ所となり、自在を得ず、三塗惡趣の溝壑に墮つ。

(筆者・兒童教育研究家)

佛さまのぞうり

こどものてらの本尊様は坐像のあみだ様。五つになるよつちやん、かわいゝ手を合せて「ナムアマミダブツ」と拜んでからしみんく言うことに

「みほとけさま。すわつてばかりいて足しんどいやろな。みほとけさまどんなぞうり履きはんねんやろな。みほとけさまのぞうり、どこにあんの」本堂の階段の下には、よつちやんの新しい下駄がキチンと揃えてぬいでありました。「ぼくの下駄、みほとけさまにあげよか。そやけどぼくの下駄ちつそうてはかれへんさかい和尚さん、みほとけさまのぞうり。大阪へ行つて買うて來て上げてや」

森 正義

お詫び

二月號吉田絃二郎先生の文中、宇治の銘茶「初音」とありましたのは「初昔」の誤植です。こゝに訂正いたします。今月は印刷所の都合で大變におくれてしまひ申譯ありません。御心配下さつた會友の方からもお問合せがございましたが、機械の關係で如何ともいたし難かつたので四月號は順調に刊行されます。御期待下さい。

編集部

民俗メモ

りつよ雛

隆 康 村 中

たらちねのつままでありや雛の鼻

微笑しくも蕪村の詠んだ一家團樂の楽しい雛祭の日、それはいつになつても懐しい限りです。「雛」という語はもと梵語のヒーナ即ち小さいという意味の佛教用語から來たもので

わが國でも古く、源氏物語等に既に婦女子の「ひいなあそび」のことが見えて居りますから、今日雛祭が特に女の子の祭日といわれるのも縁りが深いと言えましょう。

此の日は又一に桃の節句とも上巳の節句とも呼ばれ五節句の一に数えられていますが、節句とは季節の區切で時候の移り目を意味します。こうした季節の變り目には兎角病氣や災害が生じ易いので、何等かの宗教的祭祀の營まれるのが世界的な通例であります。それで或る學者はこうした季節的な移り目やまた誕生・成年・結婚・死といった人生の變り目に行われる祭祀のことを「過渡(移り行き)の儀禮」と呼んで居ります。私達の生命はその時重大な危機に臨んで居るのです。病氣や災害、いな死の危険にさえさらされています。そこでこれらの災を除き生命の幸せを希い求めるために、色々の祭儀が催されるので、節分の鬼やらいもその一つであります。

中部歐羅巴の國々でも、寒くて暗い月日が去つて、やがて明るく美しい花の季節を迎え

ようとする頃おい、村々では薬人形を作つて送り出し、焼いたり、流したりする「死の追放」とよぶ儀禮を行つています。我國でも六月と十二月とには、所謂水無月祓・大祓が催おされ人形(ひとがた)に刻んだ紙の形代又は撫物を神社に納めるのは御承知の通りですが、三月のお雛様ももとはこの人形であり、我々の罪障を祓う爲の贖物(あがもの)だつたのです。我々の受くべき災厄を負わして、それを河や海に流したのが抑もの起りなので元來老若男女の別はなかつたものです。

今日の様な雛段飾りは室町時代からの座雛の系統が發展したもので、それも徳川中期以後近々二三百年の變化に過ぎません。始めは形式としての紙の人形から紙雛となり次第に今の人形雛となつた譯です。琉球や鳥取等の流し雛の系統、つまりは素朴な雛形を毎年新しく作つては流すのが本來の形なので、紙の立雛を神様に納める所謂神雛(紙雛)は流す代りに外なりません。遠州の「菜の花雛」は子供のすさびにしてもほゞえましく素朴な形

に思えます。

こうした祓除(はらい)の習俗が支那の上巳(じょうし)の節句と結付いたのは、既に早く貞丈雜記なども説いているように、平安朝に始まつたこととて、所謂「巳(み)の日の祓」がそれでありました。シナでは漢末から三月の上巳(初めの巳)の日に行われ、魏の頃から三日に定まつたといわれる流水の上(ほとり)での禊(みそぎ)まつり・禊飲(みそぎのさかもり)は、七月十四日の「秋の禊」と並んで「春の禊」として重要視されました。禊も要するに流し雛若しくは雛送りとその意味に大差はありません。我國の一部でも此の日を磯遊び・磯祭り等と呼ぶ所があります。伊豆では雛壇の前での女の子のまゝごと遊びをいうようですが明治初葉までは大瀬明神の岬の磯で禊の酒盛が行われていたとことです。

このように雛祭の起源は全く除災招福が目的であつたのであります。この意味は祭壇の供物にも充分伺えます。悪鬼を攘(はら)う力があると思はれる神の憑代(よりしろ)(依りまし)である桃の枝を

飾り、靈魂の形になぞらえたそれを喰べると靈の力を増すとされる菱形の餅や、また豆いり・霰(あられ)等生命を授ける力ありとされるものを供え、又躍動する生命力を感じることの出来る白酒を飲み交わすのも、凡て同一の祭儀目的を指示している譯であります。それが今日雛飾りを主とするようになったのは、一つには子供の身邊のお守りとされた天兒(あまご)や這子(はこ)といった呪物の信仰習俗から女兒の雛遊が起つて來たこと(又一面には佛教によつて傳えられた雛形からも雛を飾り祀る習となつたものでもありませうが)、そしてこの天兒(あまご)が(つ)を上巳の日に流したり神へ納めたりしたことから、祓としての雛送りが女の子の雛遊と結付いて、やがて今日の雛祭となつたものと想われます。そこには新しい人間愛情の繪巻が見出されましよう。

我が兒の生涯に災厄無かれかし、偏(ひと)に生命の祥(さか)に満ちてあれと希う親と子らの暖い愛の情念が、内裏雛(うちひな)の美しい粧(ま)となつて、そこに繰りひろげられているのであります。

(静岡放送局放送原稿)

福岡短信

——江上秀靜氏から

「淨土」が創刊されたころのこと、佐藤氏が九州まで來られて、その擴大のために歩かれましたとき、以來、お附合ひを願ひ、と同時にこの地にも續仰會をつくり、淨土の讀者も相次いでできました。

その後、戦時中にも會旗のもとに、いわゆる勇士たちを送り出したりしましたが、あの烈しい月日の間にいつか「淨土」の發送も沙汰止みとなつてしまいましたのは淋しいことでした。

しかし現在、私方の——續仰會はやはり復活して、會員も廿名餘り、行事としては毎月の七日、廿五日の座談會、月曜日の禮拜、その他、寒行とか法然祭などの集ひと催しをつづけて來ていますことをお喜び下さい。

復活して、段々と伸びてゆくこの「淨土」の存在が知られてきましたら、又讀者も復歸し新しくも加わつて來ること、思つて月々を楽しみにしています。

三つの願い

竹 中 信 常

その夜は妻の番にあたつていた。私が床についたのは十一時頃だつたろうか。その夜に限つて私の床で眠つてしまつた四ツの末娘を抱いて、目を閉ぢてはみたものの仲々眠れなかつた。

一ヶ月程前、孫を連れて散歩に出て風邪をひいたのが寢こんだのがもとだが、當初は平常の頑健さから、さのみ重くは考えられなかつたが、今ふりかえつてみると本人は既に覺悟をしていたらしく、醫師の手當もむしろまわりの者の氣を安めるための、病人の心やりだつたようにも思えるふしさえあつた。注射もやつと頼んでうたせて貰つた。薬も、妻が手をかえ品をかえてすすめていたが、三度一度、三度に二度とかぶりをふり、ついには全然うけつけなくなつてしまつた。

「これ以上生きていても面白いことはなし。といつて無理には死ねぬからな——」

と冗談いつていた父のことゆえ、今更、本人の意志に反してまで強いて注射よ薬よとせめたてることが本意ではないようにも思えた。といつて、再び立ち戻る事が出来、前通りでなくとも床の上に起上がつて、食べたいものも食べることが出来るようになるのではないか、そうだとすれば何とかして薬も飲ませたいし、効く注射なら

ば打つても上げてみたいとも思つてみた。そしてまた更に、よしそらなつて直つてみたものの、その様な状態で本人が満足して残さされた生命を享受してゆけるか知らんとも迷う。眠むられぬままに思ひは走つて、父が健康だつた頃のそれこれ、萬一の場合のあれこれが、腦裡にまといつていつかな眠れそうもなかつた。十二時を打つのが聞えた。隣の病室で、妻がみとりながら仕事をしているかすかな音にまちつて、鐵瓶の湯のたぎる音が靜かに響く。ざわついていた夜の燥音が段々と靜まつて、時計の音が異様に高く耳にひびいて来る。然し、それでも時が至つたせいにか、疲れた想念に、かすかに一時をうつ時計の音が深い水底でしたようにボーンと感じた、その瞬間、私は妻の聲を聞いて、はね起きた。

父はその時、すでにこと切れていた。右下に、ややうつ向き加減に、丸くなつて、右手には眠むりに入るまで一緒に念佛を唱えながら繰つていた珠數を持つて、寂然として、横わつていた。軽く閉ぢた兩眼、長く白い眉毛が二三本電燈の光りに淡く光つていた。妻のいうところでは、一時になる少し前、寢息をうかがつてみたら、スースーととても氣持良ささうに、眠つていたので、そのまま枕もとで、縫物を續け、二針三針したかせぬ時、コクコクと丁度首の骨が鳴つたような音がした。ハツと、私を呼んだのだつた。私が起こされたのは、だから五六秒もたたぬ間であつた。まことに石が深い水底へ音もなく沈み行く如く靜かな、なつかしき故郷への正念往生であつた。

五年前の、空襲のさなかに母が逝つた。それ以後、罹災、疎開、歸國、建築、と引つづいての諸事を、若い私をむしろ引づるように

してやつて來たのだつたが、母の生前中からも、殊に母が亡つてからは、八十往生を口癖にしていた。「釋尊が八十、宗祖上人が八十、わしのおやぢが八十、わしもだから八十で死ぬんだ」人にこういつていたからには、自分自身深くそう信じていただろうし、またそうなることを念じていたにちがいない。

「でも來年からは、満で年を數えるんだから、まだ八十ではありませんよ」

といつて、私共が半ば冷かし、半ば眞剣になつて、異議を申し立てても、

「わしは昔もんだし、それに釋尊も宗祖もみんな數え年の八十だつたんだろう」

と、てんで受けつけようとはしなかつた。今にして思えば、父にとつては、満だの、數え年だのといつた、一年二年の差などは全然問題ではなかつた。ただ、自ら期して、自ら信じ、そして自らそうなることを念じただけのことである。それが、生來の恬淡さの故にか、その口ぶりが他人には冗談のようにとられたり、また、眞情を掬んでくれた人でも、さうですか、それではどうぞともいいかねる事柄だけに、まあまあとか何とかいわざるを得ない。

私たち近親者にしてもとやかくいつてはみたものの、これはその底に、死なれては、残つた者達の負擔が重くなるし、矢張りもう少し長生きしてほしいという、功利的な考えと子としての眞情とのまぜ合わさつた心持ちがあつてのことであつた。然し、そのような心も所詮ははかない人生の、東の間のいのちにしがみつく迷いにかすぎない。父にとつての此の娑婆世界は、何の未練も拘わりもない、たゞ生きさして貰つてゐるから生きてゐるのだ。だから、せ

めて自分の思つた時に、往生させて頂ければ此上もない幸せだと感じての餘生だつたわけである。あと十日すれば、正月になり、そうすれば八十一にもなるといふ、まことに際どい十二月二十日の正念往生こそ、父にとつては、この世に生を享けての最大の喜びであつたことと、私には感じられる。

父がここ十數年來、最も生甲斐を感じたのは、毎朝佛前でする勤行、それも一時間以上に及ぶ稱名念佛の間であつた。罹災前には、秋の十夜法要に百萬遍つとめるのが何よりも嬉しかつたらしく、本堂一杯に大きく輪になつた珠數の眞中で、鉦を叩く父の姿は忘れられぬものである。珠數も焼け、本堂も焼けての最近では、せめてもと、自分一人、愛用の紫檀の木魚で、毎朝一時間の念佛をとなえて押えがたい念佛稱名の喜びを感じていたのである。「わしの葬式には、どんなお經を讀んでくれずとも、皆なで一緒にお念佛さえ唱えてくれればいい」これは折にふれて口にしていた註文だつた。父の葬式を、別時念佛でつとめさせて頂いたのも、生前屢々繰り返えし、ての註文によつたわけなのである。出身が關西であり、壯年時代は長崎の大音寺で六七年暮らしたことがあるのだから、經を讀むということにかけては可成り年期も經驗も積んでいたわけであるが、晩年、殊更念佛に精進したことは、私共にとつて非常に感慨深い。遠い昔の祖師達が、學問の上、信仰の上、或は體驗の上で色々と言き明かされた道を、八十年の生涯を通じて人に語らず、或は自らも意識することなく、念佛一行に纏めて來たといふことは、それが自然に、歸するが如くになされて來ただけに、尊く、また教えられるところがあるのではないだろうか。會津の山間の寒寺に孫と共に閉關

した時も、愛用の木魚とばい丈けは離さず持つて行つた。僻村にいつて、痛んだり、ゆるんだりすると自分の手で固く巻きなおし、柄にも、丹念に幾重にも糸をまきつけては使つて來た、手垢のついたばい、父の遺品の中で私には最も尊く、此上もなく大切なものとなつてしまつた。

臨終の夜の宵、最後の眠りにつく前のひととき、さすがに加わつて來た病苦を訴えた時も、枕もとで、耳に口を押しつけるようにして唱える私の念佛に、も早やそれと聲は出せぬながら、モグモグと口を動かして、何十年と手馴れた珠數をしつかりと握つていたのだつた。父の餘生はこのように、念佛に明け念佛に暮れ、そして、臨終のきわに至るまで、念佛稱名の念願をはたしとげることが出來たのである。

八十往生と念佛往生の二つの願いと共に、父にはもう一つの願いがあつた。安樂往生である。

私がまだまだ子供の時分から、父はこの願いのために一つのことをしつづけて來た。何處で聞いて來たのか、誰に教わつたのか、いまではもう聞いてみるすべもないのだが、入浴を終えて體を拭く時絞つた手拭で、何處をより先にまず胸を三度軽く拭く。これが安樂に死ねるまぢないだとのことである。父はこのことを「ころり往生のまぢない」といつて、數十年來、入浴の際に必らずしていた。まぢないが効くとか効かぬとかということよりは、卅五歳の私が未だ抱かれて風呂に入つていた頃から、ずつとつづけてこれをやりとおして來たということに、父がどれだけ自分の臨終、死の瞬間ということを眞剣に考えていたかが窺える。なすわざは、見戲にも等しいことかも知れない。然し、そのことをするということは、自分の死

ということを念頭に置いてゐるからであつて、平常から死とか臨終とかいうことに關心を持たねば、やろうと思つてもつい忘れてしまふ。生きてゐるといふことの裏には、いつも死がある。などと口でいい、頭では考えてみるが、はたして眞にそれが、その人の生活態度全般にまで徹底してゐるかどうかは疑わしい。

今日もまた暮れぬと鐘の聲すなり

命つきぬと驚かすかな

法然上人

夕暮の空に、餘韻をひいて流れる鐘の音にこそ無常迅速の心が湧くが、えてして人は、死を忘れ、死に臨んで愕然とし、今更のようにあわてふためくのが常ではないだろうか。私は父がその壯年の折から、一つのことをついにやり通し、而も、僅か一ヶ月の病床に、苦しみとていい立える程のこともなく、眠りのうちに他界し得たことは、その信念と精進とからいつて、むしろ當然のことと思う。

肉親の父について、子としては執るべきでなかつたかも知れぬ筆を、私は敢てとつた。三つの願いを抱き、その三つとも立派にかなえさせて頂いて、西方へ旅立つた父の幸福を、せめて有縁の方々に共に喜んでもらいたいためである。一月二十三日、父の五七日忌に檀家の人々と共に別時念佛をつとめさせて頂いたが、その時私は、上に述べた父の三つの願いについて話した後で、こう人々の前でいつた。

「老僧が、あれ程にお念佛を唱えていたのに、その願いの一つでもがかなえられなかつたのなら、私はもうお念佛を唱える氣にならなかつただろう。だが私はこれで、安心して、ますますお念佛を唱えることが出来るようになりました。」

信蓮社學譽上人靜阿法門戒老和尚 合掌

み佛を仰ぐ喜び

— 第三講 —

佐藤 密雄

歎佛偈

如來妙色身 世間無與等 無比不思議 是故今敬禮
如來色無盡 智慧亦復然 一切法常住 是故我歸依

眼前の佛像を通じて、入道場しました如來の御姿の、世間に比較出来ない莊嚴さと、其の莊嚴を現する慈悲智の廣大さを、讃嘆し敬禮するのが、此の歎佛偈（たんぶつのげ）と言はれる一文である。

如來の御姿は無量の功德で莊嚴されて居る。功德莊嚴（くどくしやうこん）とは、佛德で飾られて居ると言ふ意味であるが、然し、人間が錦衣を着飾さる様に、外から裝飾品を取付けて美化し粉飾する意味ではないのである。名畫は色から生れず、名工の畫心が凝つて具象化したのが名畫である。良き心、深き知、不斷の努めをなす人は、動作の一々に氣高き人品の功德莊嚴が見られ、これに會ひ接する者に良心を呼び起させ、やがては人間社會を淨めることにもなる。如來の色身は無量の愛と無邊の智が人間の悩みと迷ひを取除か

んと働くが、そのことが色身の功德莊嚴となつて居るのである。如來の色身が世間無與等であり、無比不思議であるのは、其の愛と智の働きの無與等で不思議だからである。

人間を超えた愛智圓滿な如來の御姿は身相端嚴である。欲と怒りと痴を絶した御身は眞妙の金色で、淨妙の光に輝いて居る。然も、淨妙は、冷嚴の美でなく、一切の垢惡を許し近づけて淨化する柔軟（にゆうなん）の美である。如來の御顔は満月の如くまどかに、頬は天帝の引きしほつた弓の如く豊かに、御目は紺青にすみ、眉間の白毫（びやくこう）は光明に輝いて居る。世間の非道に怒つた人間の心を和げ、寒苦になえた身意を溫め、欲と怒と痴に固まつた人間のうらみと愚かさをなくせしめて善心に踊躍せしめ給ふ御顔であ

る。

釋尊は阿彌陀如來の色身の莊嚴を讃嘆して無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と形容されて居る。

これは如來の光明は、如來の愛と智の具現したものであつて、無量無邊と言ふ外はなく、すべての障害對立を超えて、炎王の光の如くに、如何なる時如何なる場所でも念ずることに依つてその當所に蒙ることが出来る。そして人間の心を清め、歡喜せしめ、智を開き給ふのである。然もそれは、不斷に行ぜられ人思も及ばず、賞稱も及ばず、寔に日月の光にたとへても及ばないことをたゞえられたのである。そして、釋尊も「我れ無量壽如來の光明威神の巍巍殊妙なるを説かんに晝夜一劫すともなほつくすこと能はず」とされて居る。

聖德太子は「世間は虛假で唯だ佛のみ眞である」と語られた。此は世間には常住眞實なものがなく、佛のみが眞實と感ぜられることを仰せになつたのであるが、同時に亦、人間の世間的な生活は誤解を生じ、惡が惡を發展するのみであつて、たゞ如來を信じ歸依することを通じてのみ、邪惡を淨化し善心を生じ得ること即ち善を生ずる眞實の場であることを意味されて居るのである。我々は世間を生きるに決して邪を望み惡を志して居らないのである。然るに、自分の言動が、知らぬ間に不測の誤解を招いて居ることに驚き、自己の行動が自己の意志と逆な結果を他に與え、辯解の致し方なきに惱まざるを得ざること屢々である。人各々は自分だけが誤解の損失を蒙つて居ると考へるが、逆に自分も他人に對して損失苦惱を與へて

居ることも多大とせねばならない。此のことから考へても、世間は虛が虛を生じて、互に惱み惱まし、苦しみ苦しませて居るのである。寔に世間虛假である。

人間の社會には計名字相と言ふものがある。人間は意志を通ずる通具として文字言葉を持つて居る。此れは一般動物にない人間のみの優れた道具であるが、然し、此の言葉が人間の誤りを増大させることにもなる。譬へば「蛇は寸にして人を飲む憾あり」と言ふ言葉があるが、此の言葉を用ひて小柄で元氣な人を「蛇の様な」と形容したとする。此際に蛇を恐れ嫌ふ人が、自己の蛇について日頃抱いて居る惡感のすべてを想起して、蛇に譬へられた人を、蛇と言ふ言葉につられて「毒蛇の如く執念深く、恐るべき人」と變化して考へるに至るのである。此が計名字相である。此の譬へは極端であるとしても、凡そ人は言葉や譬へで意志を通じ合ふ限り、各人の言葉や譬への感じは等同とは言へないのであるから、計名字相は免れ難く世間虛假とならざるを得ないのである。

世間は虛假に發展する。自ら眞實に志しても、世間に生きる限り虛假に惱み人を惱ませることになる。たゞ眞實なのは佛のみである。如來の色身を仰ぎ、光明を受けた時に、言葉と譬へを用ひる必要はない。たゞ敬禮するだけで、我が全身全靈は如來に受け取られて居り、如來を拜したゞけで、我が心は淨められて慰安と救ひとの歡喜は與えられるのである。如來色無盡であり智慧亦復然である。

釋尊は經に仰せられた。「其れ衆生あつて、如來のこの光に遇ふものは、三垢消滅して身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず。若し、三塗

勤苦の所にあつて、この光明を見たてまつれば、皆休息を得て亦苦惱なし、壽終の後皆解脫を蒙る」と。すべての惡邪をゆるし、淨めて、善心に歡喜勇躍せしめ給ふ如來のみが眞實である。そして、如來の此の眞實を讚嘆し「日夜に稱説して至心不斷ならば、意の所願

開經偈

無上甚深微妙法 百千萬劫難遭遇
我今見聞得受持 願解如來眞實義

佛教にふれ得た喜びを感じつゝ、今經文を讀まんとすと覺悟を述べるのが、此の開經の偈である。

法然上人は登山狀と言ふ文章の中で次の様に述べておられる。

「それ流浪三界の中、いづれの界におもむきてか釋尊の出世に會はざりし。輪迴四生のあひだ、何れの生を受けてか如來の説法を聞かざりし。華嚴開講のむしろにも交はらず、般若演説の座にも列らず。鷲峰説法の庭にも臨まず、鶴林涅槃のみぎりにも到らず。われ舍衛三億の家にや宿りけん。地獄八熱の底にやすみけん。はずべしはずべし。かなしむべし、かなしむべし。されど、今多生曠劫を経て生れ難き人界に生れ、無量劫を送りても會ひ難き佛教にあへり。釋尊の在世にあはざる事は、悲みなりと雖も、教法流布の世に會ふ事を得たるは是よろこびなり。たとへば目しるたる龜の浮木のあなに會へるか如し」と。

若し私共が、釋尊の在世に生存して居たならば、彼の華嚴經や般若經や法華經や涅槃經を、釋尊自ら説法された席に列り、其の席で

に従ひて「我も亦た此の眞實者となり、「諸佛菩薩に光明を嘆ぜられんこと、亦今の如くならん」とされる。如來を讚嘆しまつるは、やがて我も亦如來心を得んためである。「願くは如來の如くに」と言ふ願が如來を讀する心である。

悟りを得た筈である。遠い昔から、此の一個のいのちを荷負つて、三界四生を生死流轉して來たとするならば、釋尊出世の頃は如何なる生涯を何處で過して居たのであらう。釋尊のおいになつた町で、釋尊のうはさを聞きつつも遊樂にふけつて居たのではなからうか。それとも、自らの罪劫で地獄の苦にあいて居たかも知れない。寔にはずべし悲しむべきことではあるが、今幸ひにも其法にめぐり會えたのである。現に幾億の人類と幾千億の生類がある。其の中に佛教に遭遇する人は幾人であらうか。佛殿立並び、法音鳴りひびく中でも何人が佛法に接するのであらうか。自分が釋尊に會ひ得なかつた不幸は、實は現在幾億の人が佛法を前に佛法に會ひ得ざるなげきに外ならない。現在の人々が佛法の前に佛法を見ざる不幸をば、自分が永き生死流轉の間に釋尊を見失つて居た不幸として、自己を謙虚にして佛典を讀く時に、眞に遭ひ難き佛法に會ひ得た感激が涌くのである。そして此の感激を覺える時、此の聖法の機縁を、たゞ今即時に頂かねばならないのである。「我れ今ま見聞し受持するを得

た」と言ふ時の此「今」が、永劫の間のたゞ一回の今である。

法然上人は小消息と言ふ文章で、「うけがたき人身を受け、あひがたき本願にあひ、おこし難き道心を發し、離れ難き輪廻の里をはなれて、生れ難き淨土に往生せんこと、喜びの中の喜びなり」と述べて居られる。歴史は繰り返すと言ふが、宗教的回心はたゞ一回のものである。たゞ一度しか訪れない。「百千萬劫」を経てもあひ難い此の一期とする時に初めて佛教は得られる。天地を見渡せば人身受け難きことは言をまたない。たゞ人身を受けたことに感激を持つことが少ないのである。然し、人身を受けた喜びを、人間として生くる責を負ふ自覺に高めたものだけが、人道の至心たる道心を起し得る。人道に目醒めざるものは畜生道、即ちたゞ欲望に使役さるゝのみなる道に落ち行く。人道を行くものは人道を満して佛道に登らんとする。寔に起し難き道心である。輪廻墮落の道は容易くはさけ難い。道心なき人々の中に、自ら道心を支へ、他を道心に導かんとすることとは、心弱きものゝ力及ばざることである。生活の一日は、見るのと聞くことすべて道心を破ることのみである。然し、あひがたき彌陀の本願を見出したことは、心弱きものの幸ひの中の幸ひである。「天に仰ぎ地に伏して喜ぶべし。此たび彌陀の本願にあふ事を。行住坐臥にも報ずべし。彼の佛の恩德を」とは法然上人の感激の御言葉である。阿彌陀佛の御名を稱するものゝ心に宿つて、道心を守り佛道を成ずる淨土へ必ず導き下さるのが、彼佛の本願である。たゞ我々に取つて難中の難事は此の本願の偉大さを信すること、そのことである。宗教に取つては、

難く行ずるは易いのである。

然も、永劫の時間のたゞ一回の今、無限に複雑な世界の中のたゞ此の一時だけが、與えられた信入の一刻である。

「我今見聞得受持」とは重大な「今」である。「願解如來眞實義」とは、此の重大な時を失つてはならないと言ふ意味である。即時即刻に「本願に信入せしめ給へ」の願ひである。百千萬劫にも遭遇し難い信入の好機は私共に偶然に訪れたのではなく縁起成満して得られたのである。無限の過去からの天地人文が相ひかゝはりあつて、今ま一個の自分を佛前に立たせて居るのである。現在の世界のあらゆる事情が、今佛教を受持する自分を成立させて居る。今日此の一事を行ぜしめて居る世界、此の一事に凝集する世界は、今自分が信を成ずることに依つて、其の意義を完ふするのである。此處に、自己の佛教を成ずる一事で、世界を生かす意義が認められる。佛道を成ぜんとする願ひは我れ救はれんとする願ひではない。世界から「汝佛道を成じて世界を救へ」と要求されて居るのである。其れに答へんが爲めに「願解如來眞實義」をなすのである。善導大師の發願文に「彼の佛の本願に乗じて阿彌陀佛國に上品往生せしめたまへ。彼の國に到り終つて、六神通を得て、十方界へかへつて、苦の衆生を救攝せん。虚空法界も盡きんや。我が願も亦是の如くならん。發願し終んぬ。至心に阿彌陀佛に歸命し奉る」とある。此の發願を成ぜん爲めに「如來眞實義」を解せんと願ふのである。

次回講讀は文學博士大野法道先生です

◇新入會申込の方々に◇

法然上人鑽仰會は、申込によつて何時からでも、誰でも入會し、月刊信仰雜誌「淨土」の配布をうけることができます。

◇本會は、淨土宗祖法然上人が示された念佛信仰をいまの生活の中にふかめてゆくとともに、更にひろく社會に正しい信仰をたかめてゆくために結ばれたものです。

◇會の目的をたゆまず達してゆくために、毎月「淨土」を刊行し、會員に配布し既に十六年に及んでいます。世間の出版界が流轉の姿を辿つてゐる戰時、戰後を通じて、「淨土」はつねに着實に歩んできております。淨土の歩みはとりもなおさず、正しい信仰に生き抜いてゆく會友の方々の歩みに他なりません。

◇その他、本會では眞に心の伴侶となる圖書の刊行頒布、講演會、座談會などの事業を行うとともに、多くの人々と廣く手を携えてゆく上から、會員の申込によつて講師の紹介派遣もいたします。

◇會員となるには、半年一三八圓または一年二七六圓を添えて申込まれる他には別に手續を必要といたしません。申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

◇會員は淨土に投稿することができます。但し採否は編集部にお任せ願います。

芝園だより

◇現實という奴はまことにしまつにおえない難物で、合同だ、一體だと、それが結構で誰もが希望しているともみていると、現實は、てもなく分裂し對立してゆく。一體どこに問題があるのだろうか。

◇平和を護らねばならぬし、誰もが平和をほんとうに念願しているのに世界は、毎日のニュースが傳えるものは、平和に背中を向けてゆくような傾向が目立つてゆく。大きな問題だと思ふ。

◇しかしそれだからと言つて、この難物の、手に負えない現實を見捨てることは出来ない。仕方がないとききらめてはいけない。現實をたとえ一分でも半分でも、我々の、世界の念願する方向へ向け變える餘地がある限り、平和を呼ぶ聲を、努力をつづけなければならぬ。佛教者の、宗教人の、大きな願ひであり、そして日本の唯一の懺悔道でもある。

◇青く萌えゆく芝園に立つて、つくづくと春寒という言葉を想う。常樂の彼岸に到ることはまことに容易ではない。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿五年二月二十五日印刷
昭和廿五年三月五日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田神保町三ノナ

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

淨土トラクト第二集近刊

誰にも親しめて分り易いお彼岸の話
興味ふかい民俗を描いたお彼岸の話
自然に信仰心が養われるお彼岸の話

正しい信仰が求められている。文書傳道こそ、それに
こたえる第一歩。お彼岸の施本に最適の書

竹中 信 常著

お彼岸の話

一部五圓
送料六圓

本文十二頁 別表紙裝釘

◇二月末發行、豫約申込順に送本いたします

◇送料一〇部以上十二圓、一〇部を増す毎に六圓増
但し五十部以上三五圓、百部以上當方負擔

◇二百部以上は希望申込(但し二月末限)により表紙に
寺名刷込をいたします。

申込所 東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二二八七番

學生募集

第一學年 三〇〇名
第二・三年 若干名

文學部(哲學・史學・文學科)

佛教學部(佛教學・梵文學・宗學)

旧制中學卒業者には資格認定の道あり

大正大學

出願受付 二月十日より四月八日まで

試験期日 四月十一日本校にて

入學案内は二〇圓及び封筒(切手財布)を添えて申込の
(宛名記入)こと

東京都豊島區西巢鴨四丁目

都電・バス西巢鴨下車